

読売俳壇

高野ムツ才選

ひよつづつ違ひ簪にて薄暑光

雲南市 熱田 俊月

【評】骨壺へ納骨するのが簪渡し、用いる簪が違ひ簪。材質、長さなどが異なる。収骨室までは薄暑光は差さない。だが、故人を偲ぶ作者の胸には確かに届いている。

瀬戸の潮いよ激しき晶子の忌

佐世保市 相川 正敏

【評】「海恋し潮の遠鳴りかぞへては」で始まる歌が脳裏を過ぐる。与謝野晶子の生家は大阪湾にほど近い。かつての潮騒を偲んでいる。音のして草に沈むは実梅らし

和泉市 山崎 文恵

【評】庭に梅が落ちた。青梅と実梅の音の違いは判断できにくい。とつさに実梅と感じ取った。「草に沈む」が実梅の姿も想像させる。限界と言はれて久し蜚湧く

枚方市 安達 京子

山裾に寄りて四五軒柿若葉

君津市 榎本 静江

胡瓜伸ぶネット掴みてどっしりと

津山市 柴田真由美

薫風や遊ぶことは学ぶこと

土浦市 今泉 準一

本箱より「はだしのゲン」を帰省の子

和歌山市 中筋のぶ子

かき氷桜島から火が見える

新潟市 古泉 浩子

尺取の大きな一步大宇宙

小田原市 北見 鳩彦

正木ゆう子選

朝の神夕べの仏朴の花

神栖市 桐本 博昭

【評】朝は神棚に、夕には仏壇に手を合わせる。あるいは、朝は神社に、夕にはお寺に参る、のか。神にも仏にも自然に祈っている私たち。朴の花はそのどちらにも相応しい。

しらじらと散りむらさきや花檮

町田市 枝沢 聖文

【評】檮（梅檀）の花は小さいので、木に在るときは煙るよう。しかし散り敷けば、道が紫になるほど。句の半ばに挟まれた「散り」が上手い。風鈴の音のちらばる青畳

東京都 望月 清彦

【評】確かに、フローリングや絨毯では、こうはいかない。細かな畳の目が、「ちらばる」という表現に、適って、いかにも和室の風情である。峰雲や飛行機雲に磁場強し

宇都宮市 松広 訓

倍音の沼に響くや牛蛙

会津若松市 安藤 和繁

湖の向かふ岸まで月涼し

東京都 本多 明子

担ぎ手の声が消し去る葉騒かな

東京都 色川 幸子

小判草熟れてふるさと風甘し

高岡市 樋爪 都

蛭になり蛭ぶくろにもぐりたし

草加市 入江 幸子

葉隠れのゆりのきの花ふりあふぐ

相模原市 大谷千恵子

小澤 實選

すぐ洗ふ赤腹の針はつしし手

大阪市 今井 文雄

【評】赤腹は桜うぐいしの別称。産卵期で腹が赤くなっているところを強調しているわけだ。釣り上げた赤腹の口から釣針を外した後、すぐに流れて手を洗っている。

大海月ゆらぎのぼりや身かたむけ

札幌市 村上 紀夫

【評】大きなくらげが、ゆらぎながら水面へとのぼっていく、全身を傾けて。水族館で見たのか。中七から下五がていねいな描写である。青嵐吹き過ぐ今は無き母校

羽生市 岡村 実

【評】母校のあった地を訪れて、木々を吹き抜ける嵐を身に浴びている。学生の頃に同じような経験をしているのだろうか。でも母校はない。両腕で抱いて新樹の気を貰ふ

高知市 加田 紗智

短夜や寝顔の横のぐりとぐら

福岡市 稲永 順士

八勺の徳利で酌みし冷酒かな

北茨城市 戸井田 孝

鉄を截る火花と匂ひ蚊喰鳥

川越市 益子さとし

ソーダ水君より先に干さぬよう

長野県 村田 実

皿のピザ攫ひ五月の空へ鳶

神戸市 吉野 勝子

代行で退職願出す五月

熊谷市 間中 昭

津川絵理子選

塾かばん提げて潜る子夜の茅の輪

八幡市 会田重太郎

【評】塾帰りだろう、子供が一人茅の輪を潜る。子には子の願いがあに違いない。「夜の茅の輪」に危ういような、子供の健気さが伝わってくる。茅の輪の句として異色だ。競わずに生きる選択蝸牛

東京都 石川 昇

【評】競いたくないけれど社会に競争させられているような現代社会。競わずに生きる選択もあるのに、という思いを蝸牛に託した。緑さす木彫展の小鳥たち

川越市 大野宥之介

【評】バードカービング。木で鳥を彫り、またそれを見て楽しむ人は多い。木彫展のあたたかい雰囲気、季節の取り合わせが美しい。ビヤホール酔って好きだと言はせない

島根県 重親 映人

綿棒の二百の詰まる薄暑かな

奈良市 奥 良彦

薔薇の香の届けよ戦なくなれよ

大阪市 貝田ひでを

若葉雨モスクの壁に児の遺影

さいたま市 関根 道豊

茶畑に父の影あり草の笛

佐渡市 野田 守遊

あつばつば母の背丈のまた縮む

町田市 谷川 治

荷車の父のこゑあり麦の秋

下妻市 神郡 貢